港区探訪

パックナンバー

落語の町を歩いてみれば

第四話 首提灯 ～芝を歩く～

古典落語の中には港区を舞台とした噺が数多くあります。
さまざまな落語の世界を通じて、江戸から続く港区の歴史と今を訪ねてみましょう。

落語「井戸の茶碗」あらすじ

―― ある晩、酔っ払いの町人がふらふらと芝山内（さんない）を歩いていると、通りがかりの武士に道を尋ねられた。町人は、相手が田舎から出てきた侍であろうと決めつけ、酒の力に任せてさんざん悪態をつく。その挙句、調子に乗ってツバまで吐きかける狼藉を働いてしまった。
これに怒った武士は、刀の柄に手をかけるやいなや、居合い腰でスパッと町人の首をはねた。これがあまりに見事だったので、町人は自分の首が完全に切られてしまったことに気がつかない。武士が去ってからも、ぶつぶつと悪口を言いながら歩いていく。
すると、知らず知らずのうちに、首が左へと回りだした。おかしいなと思って元に戻すが、次第にまた左へ回っていってしまう。
そのうちに、石につまずいて首が落ちそうになり、初めて首を切られたことに気がついた。その時、近くで火事が発生したことを知らせる半鐘が鳴り出し、「火事だ」という声があちこちから聞こえだす。
大勢の人々が道へ出てきて、大騒ぎになり、あっという間に道は人でいっぱいになってしまった。どちらへ行っても人にぶつかってしまうので、町人の首はそのたびにころがり落ちそうになる。
そこで町人、自分の首をひょいっと差し上げて、「はい、ごめん、はい、ごめん」。

※町人は品川の遊女に会いに行くところで、武士は麻布の屋敷への道を尋ねたのだとか。当時、この辺りには、試し斬りや追いはぎが出るという噂もあり、町人は酒の力を借りて勢いをつけたのでしょうが、裏目に出てしまったようです。

お江戸の豆知識

斬り捨て御免！武士vs.庶民

時代劇でしばしば見かける「斬り捨て御免」のシーン。
庶民が非礼を働いた場合、武士はその場で打ち捨てにしてよいという特権ですが、むやみに人を斬れば、殺人事件として扱われました。
実際に斬りつけた場合、武士は町奉行に届け出て、その経緯について裁定を仰ぐ必要がありました。正当な理由なく刀を抜いたとあらば、切腹を命じられたり、お家断絶となることも。
ですから、やたらに斬りつけることはできませんでした。庶民もそれを承知していて、わざと武士を挑発することもあったようです。

火事と喧嘩は江戸の華

しばしば火難に見舞われた江戸。出火の報せは、火の見櫓（やぐら）から半鐘を鳴らして伝えられました。火元が近ければ連打、遠ければ間隔をあけてという具合です。
町火消組織「いろは四十八組」が誕生したのは、享保5(1720)年のこと。普段は鳶職を生業（なりわい）とする彼らですが、火事場では建物を取り壊して延焼を防ぎます。
高所を身軽に動き回り、猛火と戦う町火消たちに、町民は憧れのまなざしを注ぎました。中でも花形は纏（まとい）持ち。若くて背が高い美男子ばかりだったようです。火の手が上がると、道は野次馬でいっぱいになったとか。

一. 芝山内

「首提灯」の舞台となった芝山内。芝山内は江戸時代の増上寺境内のことで、現在の東京タワーやプリンスホテルの辺りまでを含む地域一帯の呼び名でした。
港区はもともと坂の多い地域ですが、増上寺へ向かう道はほとんどが上り坂。たとえば、「芝学園下」交差点から東京タワー方面へと向かう道路の傾斜は、14%(8度)あり、緩やかな山を上っているかのよう。
このように、増上寺の奥に進めば進むほど上り坂が険しくなっていくことから、山内と呼ばれるようになったのかもしれません。

▲東京タワーを背後にした増上寺の大殿。

▲「芝学園下」交差点にある道路標識。

二. 門

▲現在も圧巻の大きさを誇る三門。

増上寺を囲むように、この辺りには多くの門や門のつく地名が残っています
まず、大門駅から増上寺に向かう途中にある「芝大門」。慶長3(1598)年に増上寺が芝に移転してから門前町として栄えた場所です。
その先には増上寺の表の顔として有名な「三解脱門(三門)」があります。火事や空襲をまぬがれ、江戸初期に徳川家菩提寺として大造営された増上寺の当時の面影を唯一残す建造物です。
すぐ左には「黒門」があります。ほかにも地名として「虎ノ門」や「御成門」などがあります。

三. 立て札

三門の手前には、落語「首提灯」の舞台となったと記された立て札が立っています。
江戸時代、増上寺の境内は暗がりで、提灯を持って歩く人も多かったのでしょう。
立て札の隣には、常夜燈の模型も。これは江戸の夜道を照らしていたもので、当時を偲(しの)ばせてくれます。

上:「首提灯」のあらすじが書かれた立て札。
右:江戸の面影が垣間見られる常夜燈の模型。

監修:芝落語会会長 西田高光　参考文献:『増補 落語事典』東大落語会編/青蛙房、『まち探訪ガイドブック』俵元昭監修/港区産業・地域振興支援部、『競作かわら版 落語と江戸風俗』つだかつみ・中沢正人著/教育出版、『目からウロコの江戸時代』武田櫂太郎著/PHP研究所、『江戸三〇〇年「普通の武士」はこう生きた』八幡和郎・臼井喜法著/KKベストセラーズ、『お江戸でござる 現代に活かしたい江戸の知恵』杉浦日向子監修/ワニブックス、『大江戸まるわかり事典』大石学編/時事通信社

はみだし情報

首を斬られた町人が、その首を提灯のように持って…というお話は怖い話のようにも思えますが、実際の落語では、落語家の巧みな話術と身振り手振りで、ユーモラスで見事な滑稽噺になっています。

▲このページのトップへ

(公益財団法人 港区スポーツふれあい文化健康財団)
港区赤坂4-18-13赤坂コミュニティーぷらざ
電話:03-5770-6837/Fax:03-5770-6884
お問い合わせ:fureai-info@kissport.or.jp

Kissポート財団について

JQA-QMA12663
JQA-EM4580

10861140(03)

このホームページはKissポート財団の公式ホームページです。このホームページのすべての権利は当財団に帰属します。
当財団の許可なく複製、転載は出来ません。